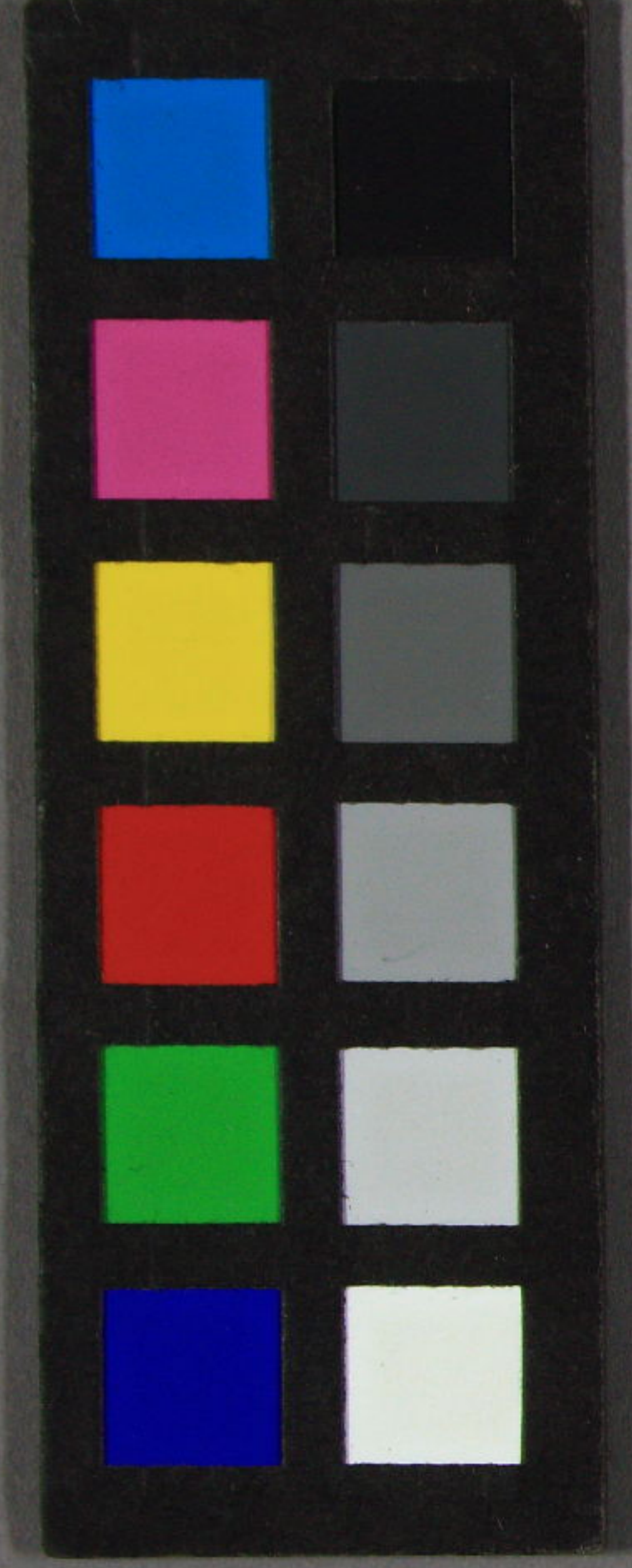


碩口震陽菴

殘花集

全

東京 文學同志會出版

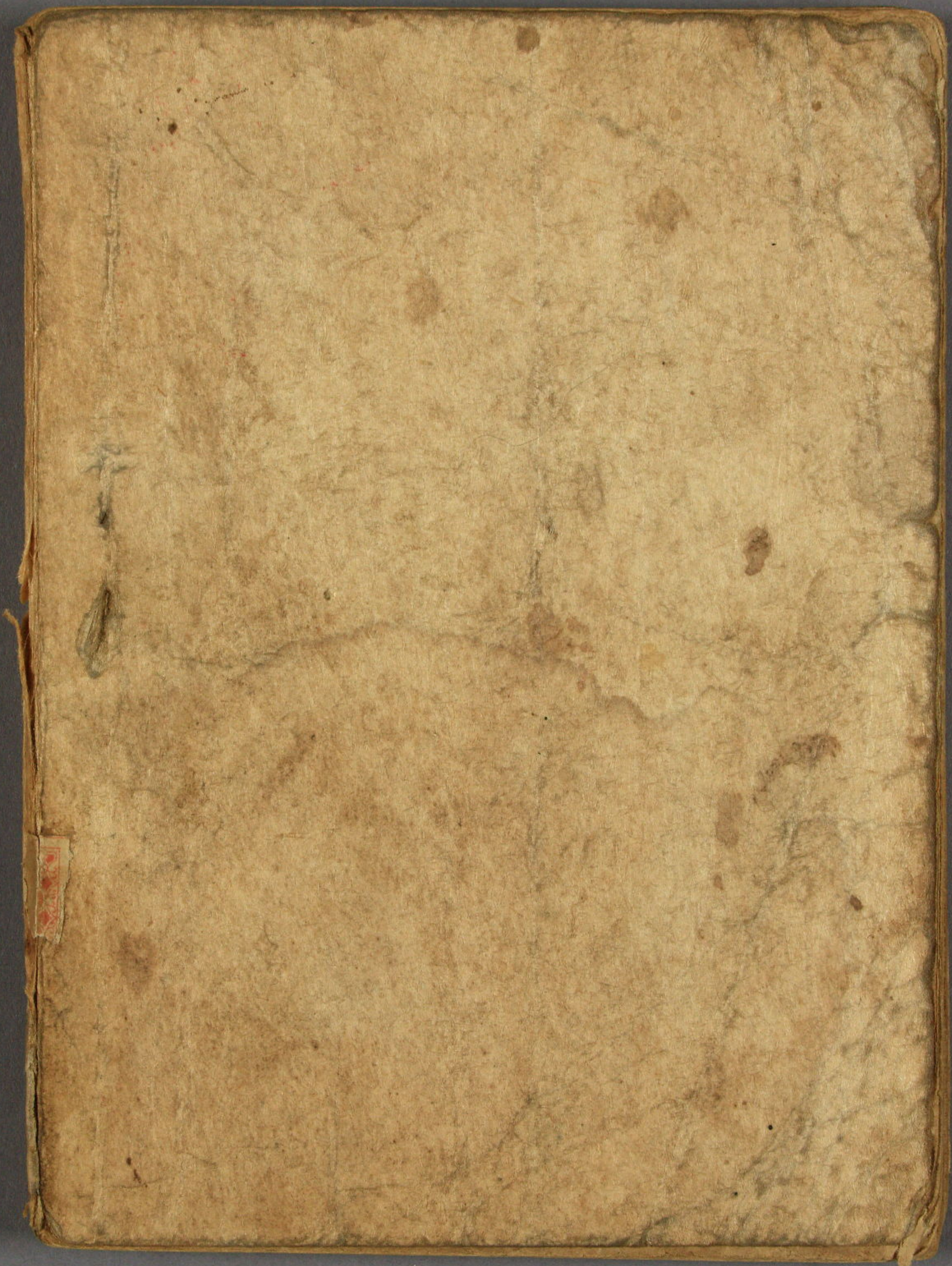


殘

花

譜

大學曰志書四





序

名づけて殘花集と云ふ、此集先年文學同志會の發行に係る心琴中落花集の續集とも云ふべきものなり、而して此處に余が特に讀者諸士に謝せざるべからざるは落花集中に出したるものを再び此集中に入れたることなり、一度公にしたるものを再び世に出さんは實に罪深き業なれども、

誤植の點及措辭の妙ならざるものありし
を以て其れ等の點を正し少しく推敲を重
ね再度世人に問はんと欲するものなれば
讀者幸に諒せば幸甚

明治卅七年四月櫻花正に微笑
を呈せんとするの交東京芝の
寓居に於て

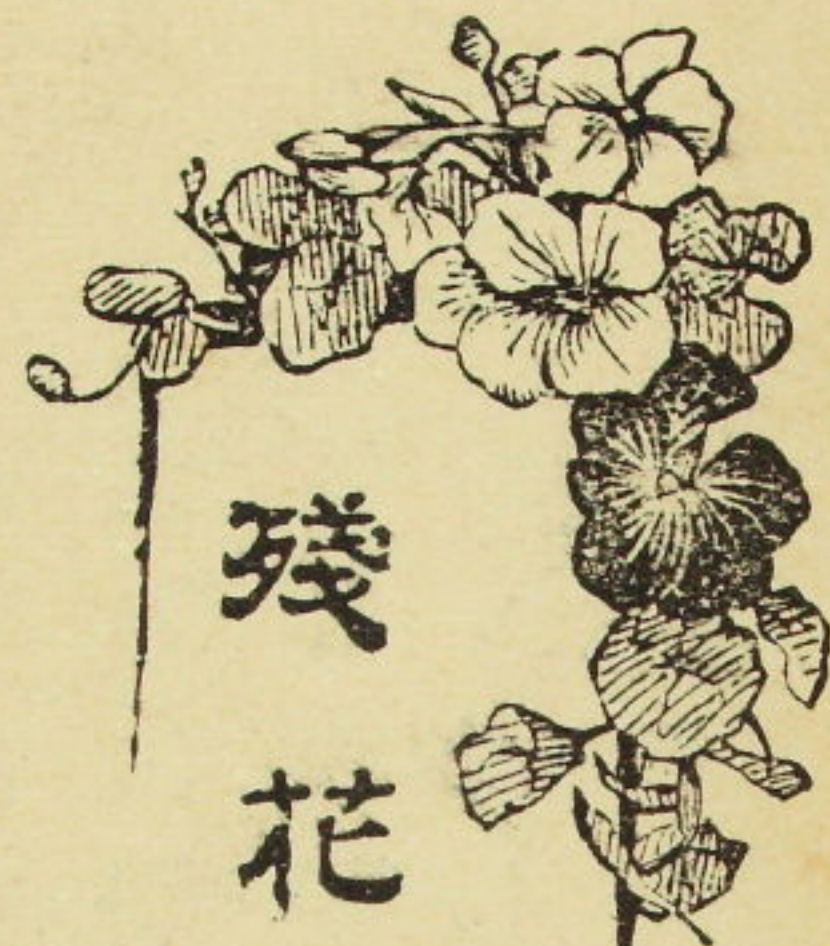
著者識

殘花集目次

平和	一
天國	九
白鳥	一二
春の日縁に風を取りつ	一五
谷川の春	一九
春の山家	二〇
深山の春	二一
廢寺	二二
潮の夕	二四
靈泉	二七
雲の行へ	二九
海棠	三一

のぞみの淵	三二
愛の泉	三六
薊花	四三
紅薔薇	四七
秋別	五〇
織姫	六〇
荒波	六四
清水	六九
行く水よ	七一
露ふ花	七三
薄倖なる詩人	七七
虹	八〇
海濱に佇みて	八二
散るべき花	八六

戀しけり	八七
古城の落日	九一
鑿の跡	九六
墓畔の夕暮れ	九八
小猫	一〇〇
可憐兒	一〇三
笛の主	一〇七
老武者	一一二
野の花	一一六
妻琴	一一八
行く手は暮れて	一二九
林檎の蔭に	一二二
戀を	一二三
秋の胡蝶の怨	一二四



殘花集

平和

樋口麗陽著

夕陽は森蔭にかゝりて
其處に草摘む女男の子は
さも似たらずや胡蝶の夢

殘花集目次終

心弱しと	一三四
神馬の聲	一三六
遊子よ貴人よ	一三九
孤獨微吟	一四二
見よ紺碧	一四八
月下の武人	一五〇
春のうたげ	一五三
由良の波の思	一五八
都大路	一六二

水面にゆらぐ青柳の
枝に音訪ふ春風弱く
四方には響く鳥の聲

夫れ夕空の雲深く
秘めます神の囁め語
天地に觸るゝ聲きかば
平和に嘔歌ふ村の子は
あゝ奇し美しと叫ぶめれ

平和嘔歌て酌交はす
朝な夕なの酒盃に
白紫に散る花は
神のみかざす花と知れ

朝に生れ夕に死す
人生の運命を思へば
來る年々に咲き匂ふ
花にも比せん價值やある

花にも若かぬ人の子は

天に叫し地に伏しつ
何を好みて血を見るや

さは謂へ闇く偽りの
都巷の人よ云ふ勿れ
そこに神まし平和の
酒に酔ひつゝ朝夕を
無限に眠る民あるに

家並僅かに二十餘の
戸々に時めく歡樂は

都巷に咽ぶ人や知る

老若男女隔てなく
歡樂盡す團欒の
夢路は淡き夕雲の
美しきに匂ふ花の色

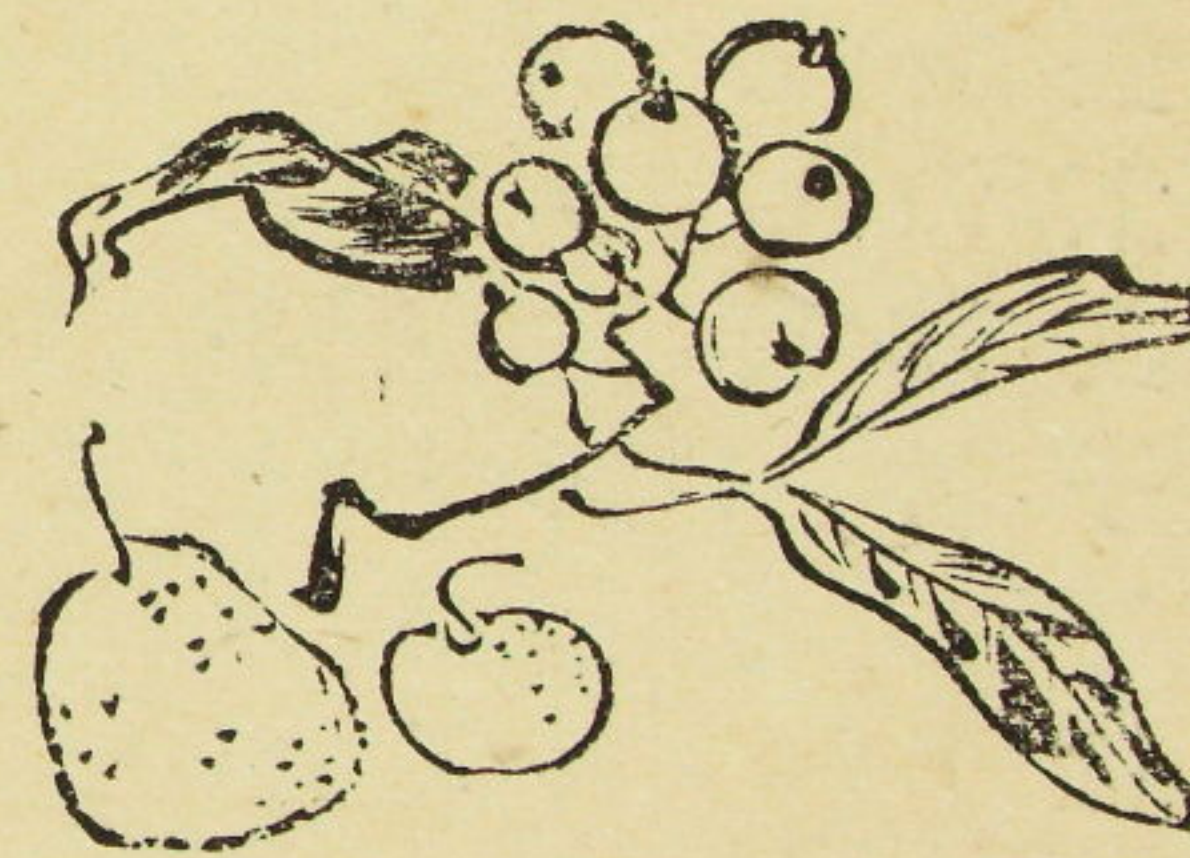
嗚呼美はしき夕雲の
花のうてなに平和の
聲ききませる御神よ
名利に走り狂ひたる

下界の衆ひとの其の中に
僅かに美しきみ光を
仰ぎ守りて口々に
平和の神のみ名誦して
天に嘔う歌たへる子等あるを

花の臺うてなにましまして
平和の酒に酌む民の
住ひ家近く來ます時
永き平和の福音を
優しき子等に傳へよや

十年振りなる慘憺の
糧食かなき櫃びつに手を入れて
神よと叫ぶ民衆あるも
甘きや平和の清酒を
酌みつ交しつ喜べる
五六に足らぬ僻村の
幸に舞ひ飛ぶ其子等は
炊ぐ煙ぞ豊かにて
夕顔棚の奥深く
笑ひ囁ささめく睦語の

心は遙か天橋の
神の宮居に通ふめり



天 國

僻村の春の夕暮れ
白、赤の桃咲く家
箸とる聲さゝめく聲
いとにぎやかに
いと美はし
此家の二男
次郎作は市にと出て、
草茂き、花多き
曠野の小路を

馬引きつ鼻唄低く
今とぼとぼと
歸り來るなり

遅^{おそ}かりし次郎作よ
今日の代^{しろ}多かりしか
互に語りつ笑ひつ
いと睦やかに

あゝ憂、あゝ悲
何處にかあるよ

嗚呼團欒、嗚呼笑聲
是れ天國、是れ神聲



白鳥

古池の水清碧たり
冴かなる月の光
斜に水を射りて
藻の莖白く赤く

漣さやかに起ちて
左に、右に遊ぶ
水鳥の影神々しよ
麗々たる月の光を

背にあびて雄鳥雌鳥

残

花

集

(13)

銀光白羽にてりて

宛然詩のみ神が

暫しとて下界の水に

清く美はしき

其のみ情けを

澄む水に止めんとてか

嗚呼清き水面に二つの
靈なる白き鳥の

花

集

残

(12)

其姿いと優しき

靈なる白鳥

汀^{みぎわ}邊に立ちて

羽ばたきつ天を仰ぎて

淨々たる聲を放てば

皎々たる月の光は

一片の浮雲に蔽はれて

その麗はしき優しき

靈なる白鳥何處にか飛びぬ



春の日縁に風を取りつ

春の日うららか

縁に出でて

汚れし衣の

風とれば

思ひぞ起す

三年の昔

亡き母君の

手づから縫ひて

東にさすらふ

我身に着よと
みこし給ひし

其衣今は

袖口つゝれ

裾の邊ほつれ

汚つき洗はず

虱たかり

此季此頃

虱に苦しみ

いとし堪へぬに

亡き母思ふ

泉下に夢見る

垂乳根の君に

何とて應へん

其のみ情けに

積るは汚れ

たかるは虱

旻天空しく

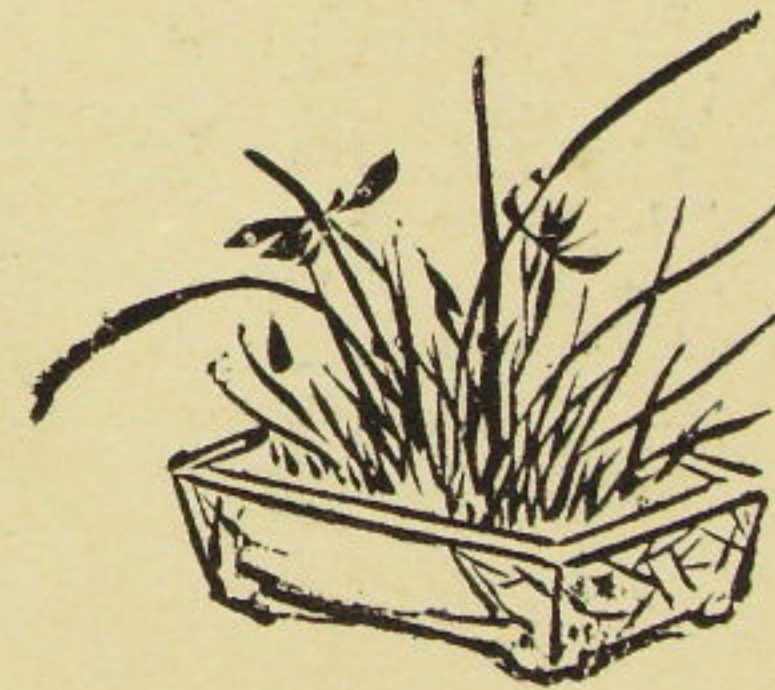
可憐の孤兒を

轆轤不遇の

苦地に泣かしむ

嗚呼天嗚呼神

怨みぞ積る
何時にか成らん
嗚呼我が希望



谷川の春

谷の流れを掬びつゝ
水の源奥行けば
桃花白く又赤く
せせらぐ水に花散りて
ここにも花咲く春はあり
ああ末遠く流れ行く
花の心や如何ならん

春の山家

塵の巷に逍遙へる
人こそ知らぬ山が家は
香に酔ふ春を啓示する
櫻花遠近薄白く
漂よふ雲よ美の神の
ささげし花の衣の色
無心の鳥に波ゆるく
過る月日を樂しけれ

深山の春

一人旅路の淋しさは
語らふ友も鳴く鳥に
花の白雲分け入りつ
深山の春を音訪へば
鳴く鳥の音に花散りて
哀れ心を傷ましむ

廢 寺

笕の水の末とへば
哀れ淋しき一つ寺
軒傾むきて瓦落ち
童の樂書なけれども
朽ちし扉は半ばあき
老ひし櫻の花しげく
人戀しげにほゝ笑めり
庭の飛石苔青く

落花落葉堆し
背に負^お山の峰高く
谷の流れのせゝらぎに
哀れの聲は尙高し



潮の夕

遠寺の鐘聲陰に響きて
消へて行くへは白き潮よ
嗚呼此の夕此の潮に
絶へず囁やく響きはありて
戀に懊惱へて泣かん人の子を
汝れは絶へずも慰せんとはせり
汝れが細けく囁やく夕
汝れが語らふ朝の聲に
掬みて盡きざる慰藉はあるを

集 花 残
~~~~~(24)~~~~~

仇し希望を遠く夢見つ  
闇路行かんとあせれる子等よ  
嗚呼汝れよ汝れ静かなる夕  
來りて掬めよ筆紙すてゝ  
其處に湧かんは崇高き理想よ  
罪を深みて戀に懊惱へつ  
運命の神に怨よせて  
絶へ入らんずる人の子等よ  
焔燃へ立つ朝に來りて

集 花 残  
~~~~~(25)~~~~~


深き其懷想を語れ
其處に慰藉の聲は韻けり



靈 泉

玉垂の
神の宮居の奥深く
せせらぎ出し眞清水よ
嗚呼汝が姿麗はしや
嗚呼汝が影の潔よき
神のみ靈の潜むてふ
此の眞清水に柴舟や
花の小束をそと投げて

笑みて立てりき夕間暮れ

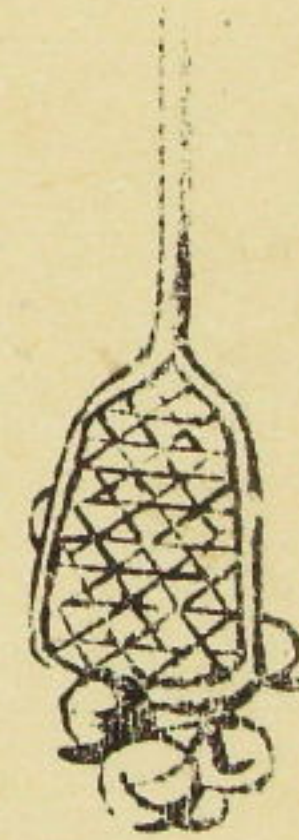
遅々と湧き出て流れ行く

水の心を掬みもせば

憂になやめる我胸に

其暫し間に玉垂の

神のみ靈や宿るらん



雲の行へ

来る年春の静けき夕

一人橋の邊に立ちつくみて

色彩よき雲の行へを追ひ

うれしき連想のかけらん時や

夫れ我希望の成る日見らん

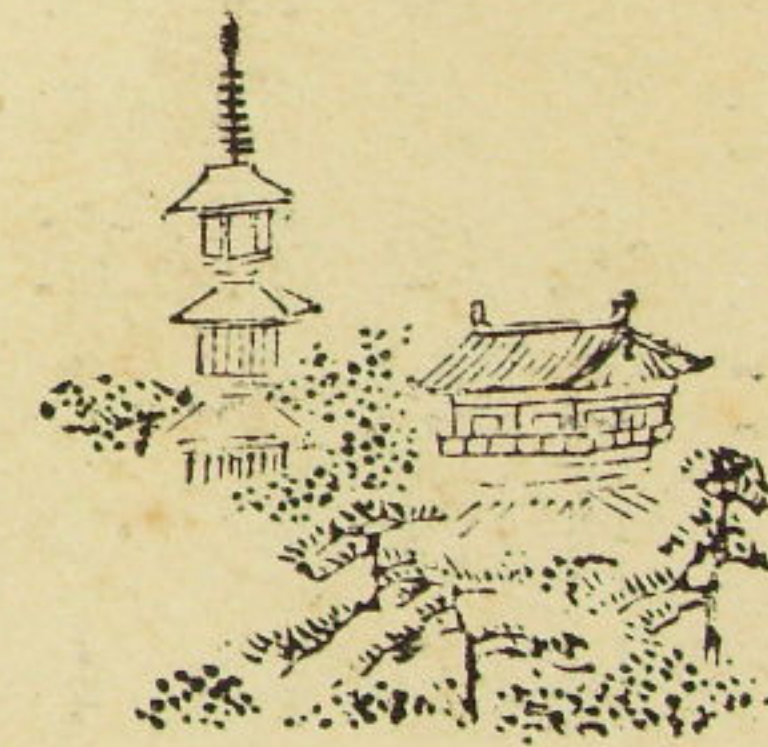
今淋しくも土橋に立ちて

暮れ行く春の空を仰ぎ見

うれしかりける昔の夢を

忍ぶ我身ぞ暮れ行く春の

嗚呼西空低き雲に似たりや



海 棠

彩ある星を望み見てか
深夜にうなづく汝れ海棠よ
嗚呼我宿望の絶ゆべくあらば
共に泣かんず優しき汝れと
人目に角ある現世に立ちて
何を希望の花に得んや

のぞみの淵

椰子の木蔭の暗くして
常世の闇の光なし
悪魔の聲の響きては
水の流れも沈むなり
魔の聲響く水あるも
神韻傳ふ流れなきや

希望の光明消へ果てて
苦み、怨み、懊惱へつゝ

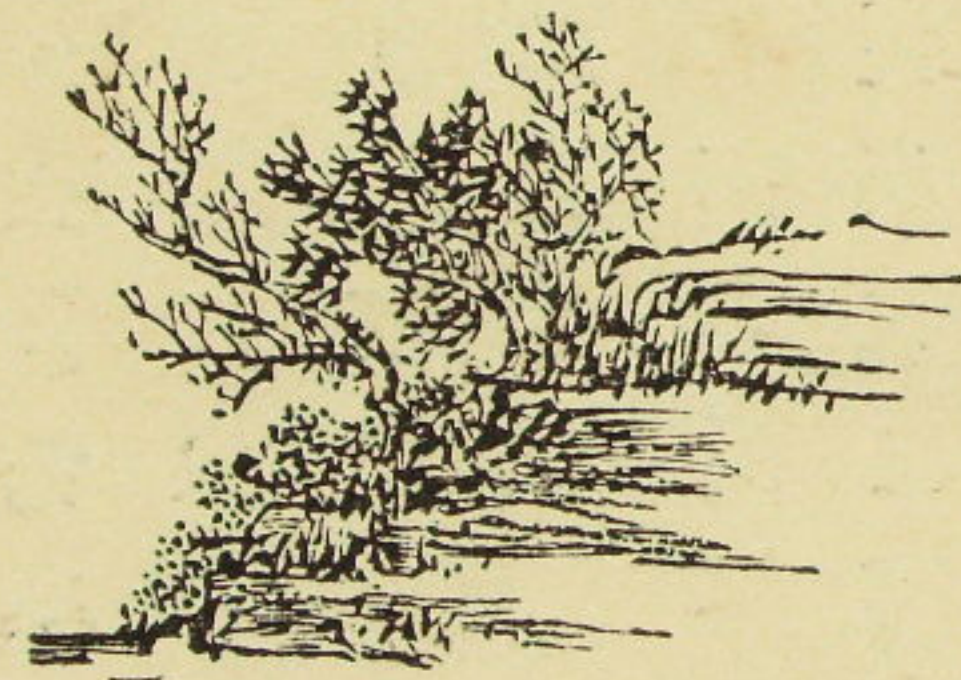
絶望の淵に佇めば
底ひ知られぬ眞清水の
再び聖に歸すてふ
神のみ言は漏るなり

み神の傳にほゝ笑みつ
山毛櫨の枯幹に身をよせて
聖さみ神の手にすがり
絶瀬の波をはなる時
其處に神界の呼聲あり

疲れし腕舷に倚り
有望の岸につかん時
其處に絶へせぬ歡喜あり

幼なき戀に身をやつし
絶望の岸に立つ君よ
嗚呼世の人よ悟らずや
清水巖に韻く處
麗琴瑠璃に落る處
汚れし戀、名、抛たば
神のみ愛は汝が胸に

夫れ永劫に消へざらん



愛の泉

殺風西より吹き初めて
三尺茅屋壁荒れぬ
天地悄たり巒紅たり
其巒連の紫雲より
秋の女神の出る時
無限の悲哀此處に湧く
三年の不作田は荒れて
骸身は病みて糧食なきを

集 花 殘

(36)

神は何處にましまして
荒田不糧の飢餓に泣く
破壁襤褸の影や見る

三年田荒れて糧なきを
憂ふる勿れ我脊子と
若き妹子は慰めて
病む脊の君の弱り手を
軽く握りて我袖の
眼に蔽へるを覚えけり

集 花 殘

(37)

秋風寒く破衣透し
一穗孤燈の影吹いて
秋立つ病みの瘦せし身に
自刃利鎗の感覺あり
嗚呼消へんとす其燈に
無限の紅涙湧くを見る
汚れし衣に身をもたせ
脊子は苦しき息つきて
冷へし唇頭に云ひけらく
か弱き妹が眞情の

未練の業に少し得て
紅涙こもる此の藥
早や飲み干して明日よりは
運命を何に繋ぐべき
涙に眼を濡ふして
靜かに妹は語るらく
憂ふる勿れ我脊子よ
今日の藥はつさるとも
か弱き腕の業あれば
日々の藥は得られなん

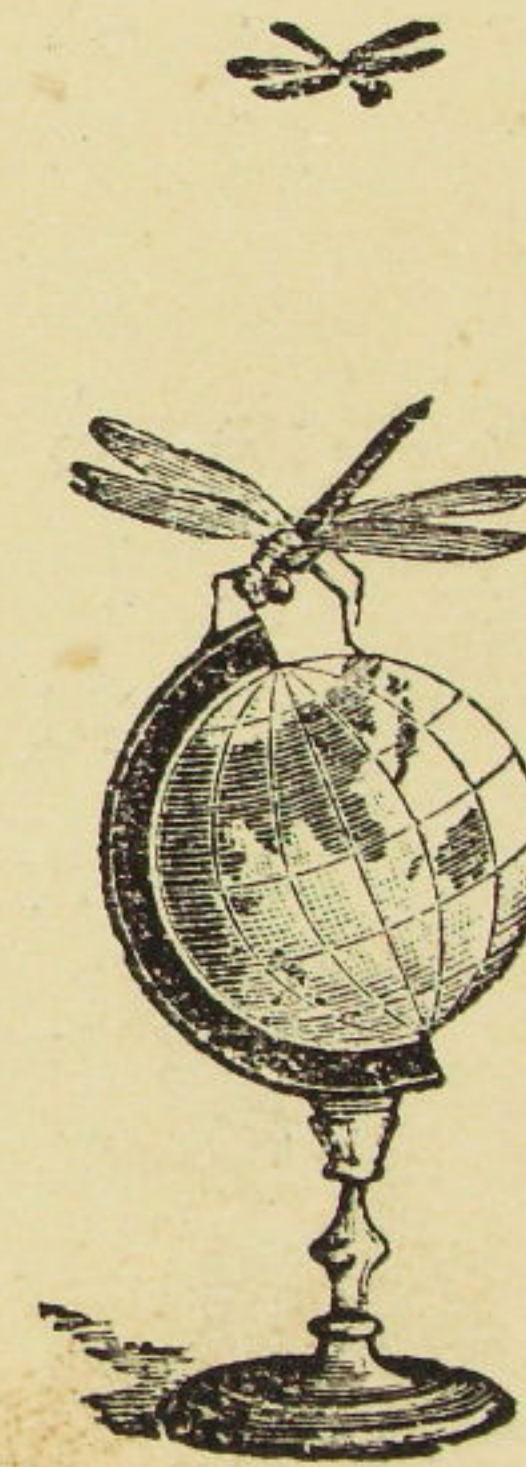
心落しそ我脊子よ
など脊の君を死の神の
犠牲としなすに得堪へんや

嗚呼我が妹よ己が身の
死神の前に打伏すは
小石を碎く價值ありや
されど残りし妹と子の
末の運命の俤ばれて
望み甲斐なき病の身も
草に伏さんといなむなり

契りぞ深き妹と脊の
互に語る真心の
底ひ知られぬ情こそ
うれしからずや愛の神

田荒れ糧盡き身は病みて
明日の運命を叫ばんも
妹脊の胸の愛の血は
露に浮べる星の如と
水面に映る花の如と

流れ盡さざる愛泉の
流るるまゝに愛神は
温かき笑み浮ぶなり



薊 花

戀に萌へ出し星一つ
彼方の嶺に落る時
其處に悲しき影や見ん

戀星出でず月出でず
森の木蔭の仄暗く
流るる水の物凄し

若葉の梢はらいつつ

狹霧に消へし鐘の音は
人生の果敢なき息の如と
消ゆるは何處曠野の末か

森の裾路に通ひたる
一つ流れぞ神秘めし
美妙の聲ぞ韻くなり

我れ朝夕のさすらいに
通ひ馴れたる草の橋
夕語らふ友なくて

西空紫雲眺むべく
橋に立ちしは幾十度
朝うれしき詩ならず
西の詩人慕ひては
薊に萌へし戀星の
焰に似たる胸の血を
清水に泣きし幾朝

今尚橋に佇めど
全き友輩得るに難し
今尚ほ水に泣き伏せど

西の詩人影にだも
波間に映る時あらじ

嗚呼野の末の花薊

我は今日より汝と共に

無味干糲の人生を

花の心と過さんに

神のみとがめ

ありや なしや



紅薔薇

しげき人目の關越へて

君が送りし紅の

薔薇の一枝夕づつの

うすき光に水枯れぬ

されど萎れぬ雄々しさは

さなり優しき我君の

ふかき情けに似たるかな

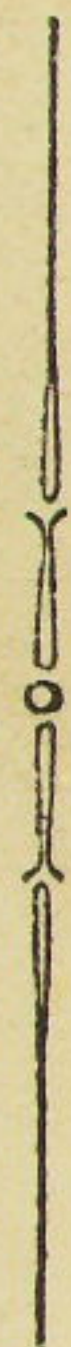
天に怨をよする身の

やさしき君がみ情の
胸の小琴に觸れもせば
胸の憂は夕づつの
淡き光に消え失せて
遠き希望にかけるらん

譬へば君がみ情けは
清き流れに似たるかな
我れは岸邊の百合の花
泡沫散りて花葩の
うすきに玉の浮びては

露の生命も繋ぎ得ん

君が情けの紅の
花の一葩身に抱きて
紅き情けに泣きし時
窓の邊近く羽紅き
舞ひ來し少き胡蝶さへ
君が情けの花の香に
暫しは酔ひて夢路辿りぬ



殘

花

集

(50)

袂 別

轆轤不遇に泣く我れ

明日は東の

花を折るべく

崇き希望の

曙光に逐はれて

懐かしきかな

故郷の山川

春の夕暮れ

夏の朝

轆轤落魄

無限の怨を

胸に抱きて

飛々片々

散る花に心をやりつ

驟雨俄かに晴れて

十里の曠野

緑々青々

殘

花

集

(51)

萬木千草
葉上微かに
輝やく光
金玉銀玉
燦爛として
宛然遠き宮居の
女神のみ苑の
美はしき
み情けの
嗚呼其れにも似たりや

鳥啼き
花咲き
花散り
水流れ
雨降り
蟲鳴く
ああ我が
可憐の怨を懷ひて
其れ等の
天地の奇美に對へば
淨々として

我なきを覺へし

されど今

此の夕暮れ

冷やけき袂別を

告ぐべく

小川の岸の

草茂き邊り

山笑み

花散るを眺め入りぬ

懷かしき山よ

戀しき野川よ

鳥よ 花よ

さらばさらば

今は我身も

たゆとふ時にあらねば

いざ別れなん

涙をのみて

されど我身は

また來ん春の朝に

錦飾りて
再び汝等にま見えん

汝等よ ああ

ささくあれよ

長く又短かき

十年の月日を

波浪荒き

東の都の

希望の海に漂よい

彼岸に美しき

麗はしき桂の花を
手折りて歸らなん程に

雄々しき山は

己が心緒の

弱きを嘲るが如く

搖々として笑ひぬ

流れ行く小川の水は

共に過ぎ行くタイムの

其貴きを喩すが如く

滾々森々として
流れ去りぬ

美麗はしき花は

小鳥の聲に揺られて

片々又片々

飛々麗々

風なきに散りぬ

我はそを眺め

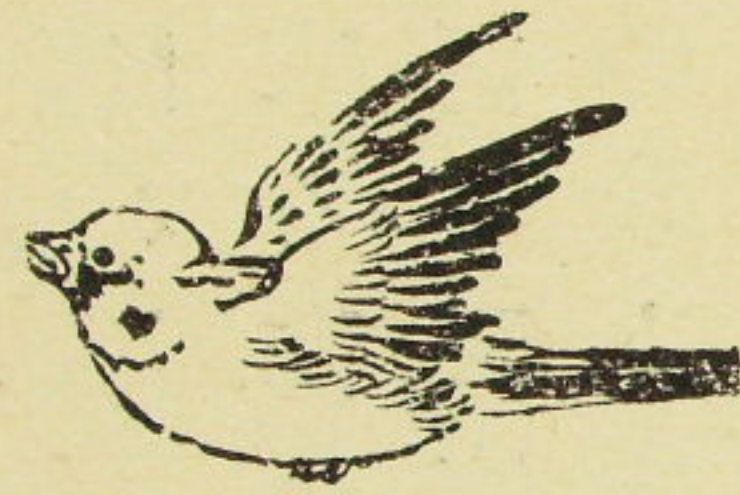
そを思ひて

茫然たる時

日は漸やく暮れなんとし

いと生温かき風は

さらさらと袂を掃ひぬ



機 織

東^{ひんがし}の空^{はの}仄々と
静かに來る薄紅き
光明は何ぞ天宮の
織機姫の乗りませる
最とも貴^{あひ}とき曙^{あけ}の君
幾千尺の高峯の
高きに迷ふ彩雲は
優しき姫のみ車の

色輪のかげのうつろいか
紫雲ふかく其が中に
薄紅雲のうるはしや
喬木^{をき}の枝に鳴り響く
調べは何ぞ織^{をさ}姫の
白きみ手漏る梭^{をさ}の音
詩に瘦せたる詩人よ
遙かに來る天樂の
喬木の根に耳かさば

崇高き思も湧きぬべし

晝夜分かず鳥荒く

渦まぐ塵に詩なすも

など温かき天樂の

高き韻^{ひゃき}の落るべき

不成の詩稿火に焼きて

曙の光明に叫ぶ時

汝が美はしき詩成らん

あな貴としや貴としや

織機姫の梭の音

光りは奇しき空を射り

姫が宮漏る梭^{をさ}の音は

天と地とに韻さけり



荒 波

波に妙なる調こそ
そは美の神の囁きか
あらず岸打つ波の音

松原三里吹く風の
響きは遠く波に落ち
絶へず囁やく音ぞ清き

男波女波の絶間なく

高く舞ひては又低く
踊る水面に舟浮けて
百千の魚を打乗せつ
銅にも似たる腕もて
見つ隠かくれつ操る海士の
その面ざしの潔よき

磯馴松の枝鳴らす
風の勢すさまじく
木の葉は高く空に舞ひ
幹も折らんず許りなり

羊に似たる女男波は

愈高く尙高く

荒立つ影の雄々しさは

海士の心を如何ばかり

高き潮に満ちしけん

十町許り沖合の

行く手の巖に波打ちて

苔の青さに玉と散る

浪の姿の勇ましさよ

神に祈りつこぐ海士は

心の限り腕かぎり

荒き波間を操りつ

巖に近く進みけり

あれと見る間に荒波は

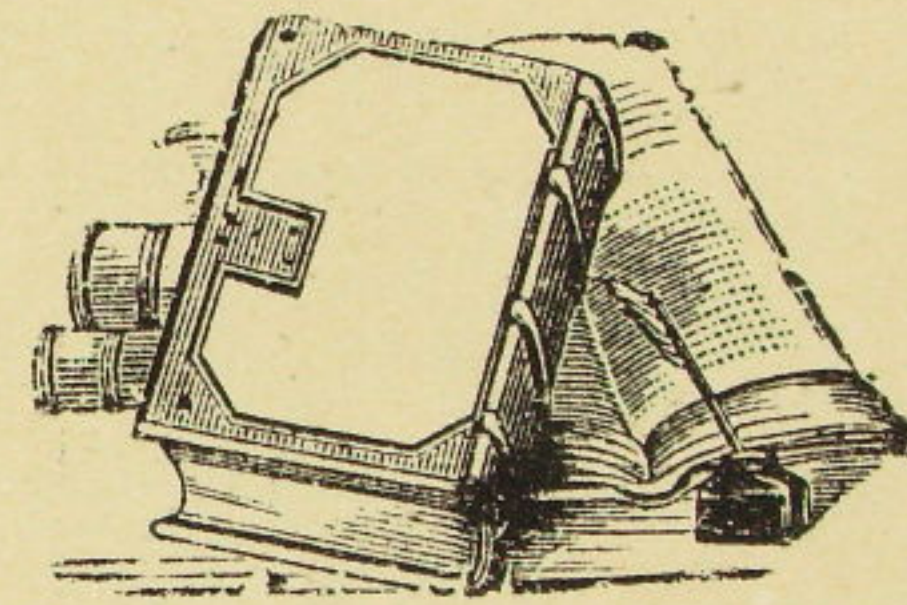
海士が小舟を襲ひ來て

見る見る舟はくつがへり

あなよと叫ぶ束の間に

水底深く沈みけり

嗚呼潔よき荒波に
失せにし海士ぞ今何處
百千の魚も小舟も
今は何處に沈み行くらん



清 水

みどりしたたる
夏樹のかげに
遅々と湧く清水清し

半ば羞らい
裾の邊高し
紅き衣見せ
さらさらと流るゝ清水に
白き白き

脛を入れて
水掬まんとする
若き女の君

流れ行く

清き玉水

雪にも似たらん

眞白き脛をひたして

何處に行かんとてか

黙々として

永劫に流れ去りぬ

行く水よ

行く水よ心しあらば
急ぎ行く足を止めて
仰ぎ見ずや可憐の白百合

憐れならずや

白百合の花の一本

病みて憂ひて

果ては萎れて

さらさらと行く水に

散りて落ちて流れ行きて
果ては何處の波に迷はん

水よなやめる

白百合の細き弱手を

取りてキスして

聖なる情の露を與へよ



露ふ花

海にはからき潮満しほてり

河には淡き水満てり

天には清き愛満てり

こなた古樹の森蔭の

花には美しき露満てり

からくもあらず淡からず
もとより甘き味はなし

一夜女神の下りまして
此の森蔭にみ手づから
静かにうつし給ひたる
其露の香の聖きかな

もとより少き花なれば
歌ひて舞はん術なくも
うれしき靈は満つるなり
やさしき影は浮ぶなり

森のかなたにあらはれて

星かと思ゆる光明は
幸ある花に與ふべく
神の放ちし光明なり

あな幸多き少き花
昨日萌へ出て今日枯れむ
露に泣くべき身ながらも
幽かにふるふ花葩に
うつらふ影のうれしさは
汝れを訪ねて詩に瘦せて
茫叢原頭草に泣く

詩人の筆に觸れん時
靈なる、奇なる、麗はしき
霑ふ花は永劫に盡きしな



薄倖なる詩人

など運命ぞ怨みなど
倖^{さいはひ}薄き詩人よ
腕の弱きに泣かざれな
筆のふるふは汝が詩の
崇きにふるふ韻あり
低きに咽ぶ調べあり
病みに憂ふる汝が身は
筆とる腕力なく

神韻崇き詩ならず
されど弱きに泣く勿れ

倅の薄きに泣く君よ

憂の涙したゝらば

汝が麗はしき詩成らん

うれしき涙したゝらば

憂愁の詩湧きぬべし

運命に愁ふ詩人よ
なやめる汝が面ざしの

片頬輝らす白銀の
光明は破れし窓にさし
起てよ歌へと呼ばふなり



虹

そは御神の戯か
曠き夏野の西のはて
弓にも似たる七色の
虹の神橋麗はしや

黄に紫に色々に
茂る小草の花の上に
浮むは何ぞ虹のかげ

若き詩人詩に痩せて
詩の崇きを求むべく
少き草花そと踏めば
虹の神橋消へ失せて
草の白銀地に落ちぬ



海濱に佇みて

神の秘密をさかんとて
榮雲低く靜かなる
白沙の濱に佇めば
渚なぎさによする小波は
神の牧場に群れつどい
小鈴ふり鳴く小羊の
聲のそれにも似たるかな
雨は嵐とならんとも

武者つばものの夢も覺るらん



鑿の跡

集 花 殘
~~~~~( 96 )~~~~~

栗鼠<sup>リス</sup>も攀<sup>よ</sup>ぢざる幽邃の  
斷崖絶壁數千丈  
夫は大神がみ手づから  
彫みましたる鑿<sup>のみ</sup>の趾  
谿谷暗く幽水の  
少き細けさせせらぎの  
底行く水は何處ぞや

集 花 殘  
~~~~~( 97 )~~~~~

岩頭聳へ雲走り
か弱き鳥の肉裂きて
食ふに強き荒鷺も
此處等嶮はしき高峯の
雲に翔^あはじと聞^{きこ}へたり
もとより神の業^{わざ}なれば
其處に氣高き韻きあり
鋭き鑿の趾なれば
其處に秘密は潜むなり

墓畔の夕暮れ

花の撫子枯芒
尾花が根に鳴く蟲の
悲しき歌を露に鳴く
墓畔の夕傷ましや

灰色なせる大空の
淡き光の夕づつは
白き芒の穂に迷ひ
傾むく石碑につたそよぎ

笛聲止みて空高く
西に飛び行く鳥一つ
凄淋草に落るかな



老武者

深山路遠く隔つれば
訪ぬる人のよしもがな
形ばかりの草庵の
軒端に茂る諸木々の
枝より枝に鳴く鳥の
哀れ老ひたる武者の
斷腸の愁思湧かんめり
叢草に咽ぶ小蟲の

集 花 殘

(112)

聲の低きは武者が
臨終の聲に似たらずや

聞けよ老ひたる武者よ
汝が若かりし其折は
凄鎗利劍手に提げて
千軍萬馬何のその
利劍一度振ひなば
天には霹靂の響あり
鋭鎗空に振ひなば
地に悽慘の叫びあり

集 花 殘

(113)

されども今は其髪の毛
黒きは霜の香に匂ひ
利劔握りし手は冷へて
血脈あらは骨高く
利劔鋭鎗天地に
響きの聲は今何處
草間に虫の唧かこちにも
枯林に叫ぶ小鳥の
聲に老ひたる武者の

時の運命ぞ傷ましや
囁やく聲も細やかに
白かる蝶は云ひけらく
やよ君暫し己が身の
運命に泣くを聞きてよや
さなり我里君知るや
花の香匂ひ温かさ
西の果てなる花の國

月にも香る色あれば
空行く雲も楽しくて
よろこび満つる天と地
其うつくしき花に生ひ
空行く雲や月かげに
舞ひて歌ひてよろこびて
悲しき夢も知らざりき

いとしや母は野良の子の
強き毒手に捕はれぬ
花の香匂ふ床に泣き

月かげ清きその水に
其香よ花よ其床よ
泣きて憂ひて悲しみて
まこと愁^{うれひ}に懊惱^{もたへ}ても
生くか死せしか憂へるか

母を慕ひて遙々^{はるく}と
西の果なる故郷を
涙ながらに立ち出でて
母の行へを尋ねれど
いと我子か懐かしと

三聲呼ばふは何國^{いづこ}ぞや

過くるに早き日のみ子は
みどり葉ふかくしたたりて

暑さいやまし草萎み

清き小川もぬるむなり

飢へて花をし求むれば
罪なる人の子に逐はれ
舞ひては落ちつ又舞ひつ
幾十の光經にけらし

足の躍るも悟り得じ

さなり惡魔^{サタ}の風吹かば
花の結びも色も香も
絶へては花に罪ありや
あらず惡魔^{サタ}のかざしたる
鋭き刃に怨みあり

さればやもゆる怨こそ
そは何、花か失戀か
あらず罪ある人の子よ

貴人^{あてびと}富みに驕らざれ
血なく泪なき似而詩に
筆持つ子等ぞ罪の世ぞ

貴人^{あてびと}聞けよ汝が胸の

血汐は酒に汚れたり

さればやなどて美の神の

其藝術^{たくみ}なる天地^{あめつち}の

奇美なる秘密知り得んや

詩人ならぬ詩人よ

知るか下界の塵の世の
人には深き罪あるを

惡魔^{サタン}の國か塵の世は
其國^{そこ}に生きたる人なれば
胸には名のみ利慾のみ

牧場の小牛友として
美神が秘める囁きを
さききて歌ひて筆にして
沈淪不全の人の子を

起てよと呼ばふ詩人を
容れて迎へて樂まん
情けの泪あるべきや

愚なるが賢に過ぎたるか
名のみ喜び他をそしり
へつらい媚を好みなす
汝等よそれ等罪惡の
刃提げ詩の神の
み前に心捧げなば
劔の光そは何ぞ

惡魔の眼の光りかも

ああ恐ろしき鋭かる
刃の光り汝知るか
美神の前に伏さん時
光る刃ももろかるを



見よ紺碧

見よ紺碧の大空に
またたき光る星の花
細き流れに映りては
羞らふ女子の眼の色

荒田茫草夏の夜の
彼方に叫び此處に鳴く
蚯蚓の聲の清ければ
衣の袖も冷ゆるかな

古堀の面に波見へず
楊柳の枝に葉に空に
螢の光涼しくて
み空の星も匂ふかな



月下の武人

月は雲間をはなれたり
栗毛の駒に鞍置きつ
華なる花の衣まとい
騎り行く路は大曠野
望めは十里林なし

乗り行く駒の足早く
蹄ひづめの音の高かければ
哀れ夢路を辿りたる

小さき野鼠驚きて
ききと鳴きつつ逃げ惑ふ

如何に烈はげしく勇ましく
敵の壘とりでも乗り越へん
血汐の躍る武人ぶりのうも
逃げつ惑へる野鼠の
可憐の姿眺めては
刃もつ手もをののかん
千軍挫く心をも
女神の持てる花のごと

武人は手縄引しめつ
駒しづしづと騎り出す
月は雲間にかくれたり
蹄の響きかすかにて
姿は朧夜はしづか



春のうたげ

春のうたげに空高き
七色車下りまして
彼方の芝生此處の水
起ちつ座りつ又舞ひつ
よろこび満つる春の姫
輕羅の裳風つつみ
み手漏る香こそ紫に
匂へる葦その花よ

黄金の髪のさらさらと
亂れてかかる細腕かひな
まぶしきばかり光あり

眞白く細き手をのべて
亂るる髪を束ねては
馨る堇に接吻くちづけて
ほほ笑みませる姿そは
げに麗はしく自然まづなれや

小鳥の聲もうららかに

白しろき翼の蝶は來ぬ
白銀がね色の蝶も來ぬ
黄なるも赤も樺なるも

彼等は舞ひて歌ひてき
優しき姫の白き手に
暫しの夢を望みてき

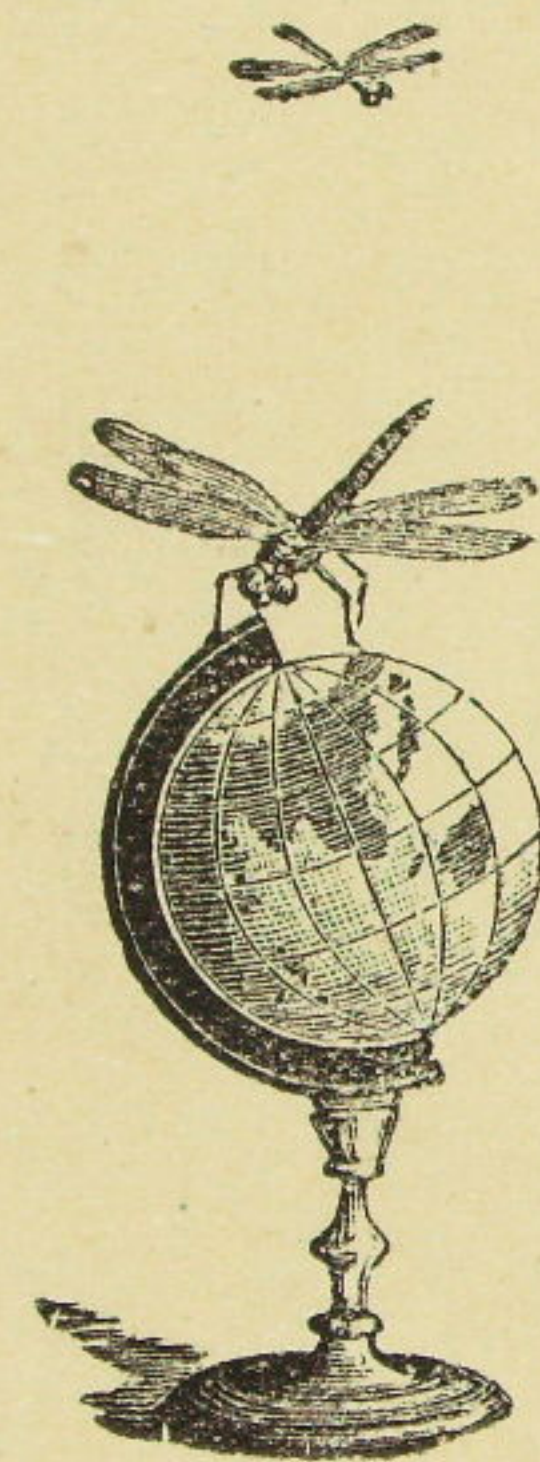
牧場に群るる小羊は
小鈴の如き聲立てて
空色碧あをく雲迷ふ

春の興^{うたけ}を叫びたり

小牛も鳴きぬ草も木も
馨り乗せ行く其の風も
春のうれしく美麗^{うつく}しき
自然なる歌を歌ひけり

嗚呼地も揺るげ雲も行け
胡蝶も舞へよ鳥啼けよ
小羊叫べ草よ木よ
舞へよ歌へよよろこべよ

樂しき歌を其の歌を



由良の波の思

西の故郷漕ぎ出でて
幾十の月の梶枕
あるは空行く雲に泣き
舷に碎くる月見ては
思ひは遠く故郷の空
たまたま霧の深ければ
月の光も淡路潟
うれしくつらく悲しくも
心は千々に碎けつつ

浪のまにまに流れ來ぬ

由良の濱邊の波白く
白沙は遠く連りて
彼方やさしき和歌の浦
みどりの松は見へねども
田鶴の昔日ぞ戀しやな

瑠璃なる空の落る處
碧き海原つくる處
黒き煙を名残りにて

浪間馳せ行汽船ふねのかけ

嗚呼其汽船ふねよ其汽船ふねよ

殘る煙は風に靡ぎ

雲の宮居に急ぐかや

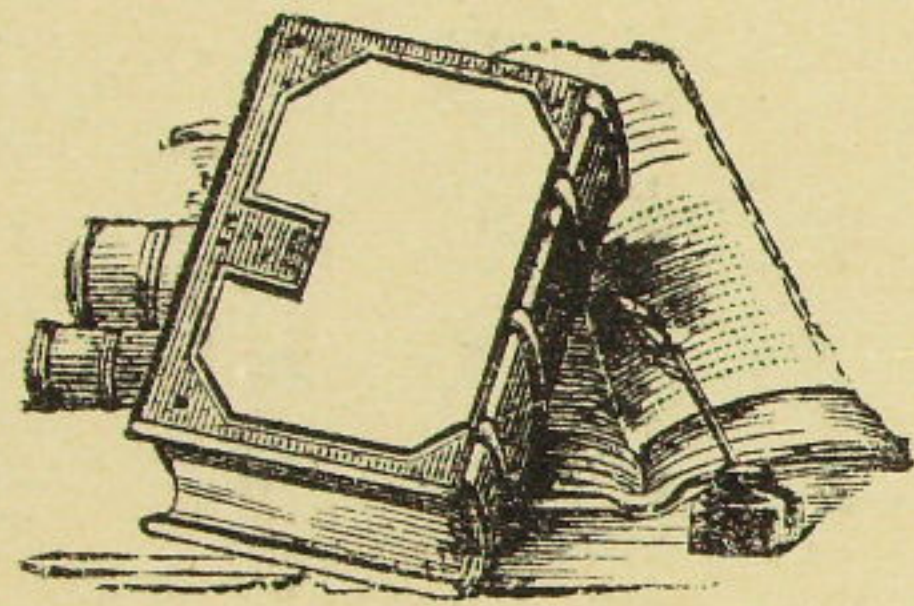
待たずや遠き其汽船ふねよ

西の果てなる故郷に

悲しくつらく樂しかる

旅の思を乗せ行かん

千鳥の群は波に消へ
よす白波に怨みあり
やよや千鳥よ空高く
舞ひて來りて我れに囁やけ



都大路

都大路に人絶へて
雪は眞白く積りたり
軒端の燈の瞬きて
空行く風の音寒し

昔日に何の罪あるか
盲は杖をたよりにて
覺束なくも辿り行く
犬も出でざる雪の路を

集 花 殘

(162)

集 花 殘

(163)

嵐の夜半も雨の日も
通はぬ時ぞなかりけり
笛の音高く又ひくく
ひびかぬ時ぞなかりけり

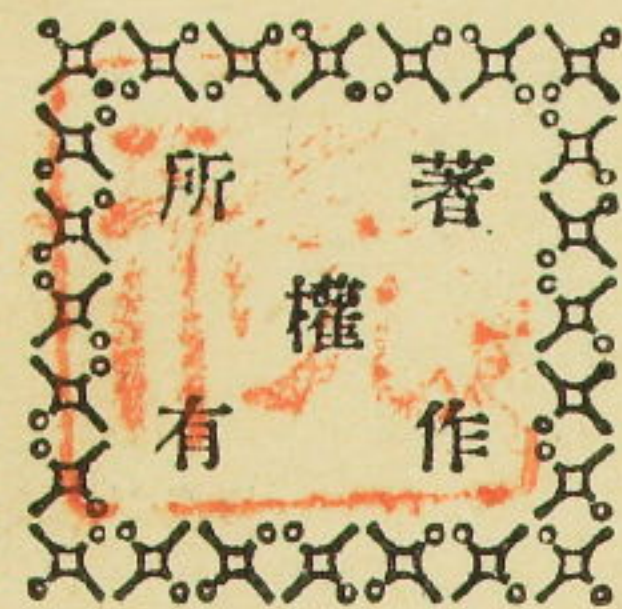
雪は烈しく降りて來ぬ
積みぬ積りぬ家も路も
撓まず倦まず盲子は
雪踏む音も危くて

殘
花
集
終

嗚呼盲子に罪なくば
神もおはさぬ常世かも
大路に住ふ富人よ
盲が胸の血汐より
ほとぼり出る笛の音を
悲しき聲と聞かざるや

明治三十七年九月二日印刷
明治三十七年九月五日發行

殘花集奥附



發
兌

元

文

學

同

志

會

大阪市江戸堀上通

文學同志會大阪支部

(電話本局千〇九十三番)

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
株式會社 秀英舎工場

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
青木弘

代
表
者

東京市神田區錦町一丁目十番地
大月隆

●●文學同志會出版圖書目錄●●

美

妙

人生の氣力

定價二十錢
郵稅四錢

人生の初旅

定價二十錢
郵稅四錢

人生の老旅

定價二十錢
郵稅四錢

人生の悔悟

定價二十錢
郵稅四錢

人生の片影

定價二十錢
郵稅四錢

人生の目的

定價廿五錢
郵稅四錢

人生經濟學

定價二十錢
郵稅四錢

人物の裏面

定價二十錢
郵稅四錢

人生の情事

定價二十錢
郵稅四錢

吾人の生活

定價廿五錢
郵稅四錢

山高水長

定價二十錢
郵稅四錢

風月萬象

定價廿五錢
郵稅四錢

斷巖絕壁

定價三十錢
郵稅四錢

枕頭の山水

定價二十錢
郵稅四錢

松風吟月

定價三十錢
郵稅四錢

| | | | | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 郊外散策 | 悲哀の快觀 | 萬情萬眉 | 近世社會主義評論 | 社會研究新論 | 最近國家社會主義 | 東洋社會黨 | 急務檄言 | 斬奸狀 |
| 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價卅錢
郵稅四錢 | 定價十六錢
郵稅二錢 | 定價十一圓
郵稅一圓 | 定價一圓廿錢
郵稅十錢 | 定價六十錢
郵稅六錢 | 定價五十錢
郵稅六錢 | 定價三十錢
郵稅六錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 |
| 精神と力量 | 虛心談 | 活學談 | 活精神 | 活禪錄 | 禪學斷片 | 聖僧道元 | 日佛教拾二傑傳論 | 馬琴妙文集 |
| 定價三十錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅六錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 | 定價三十錢
郵稅六錢 | 定價五十錢
郵稅六錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 | 定價三十錢
郵稅四錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 |

| | | | | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|
| 中等作文組立法 | 美文組立法 | 近松妙文集 | 西鶴妙文集 | 爲永妙文集 | 芭蕉妙文集 | 立身冒險談 | 冒險成功談 | 名流の家憲 |
| 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅四錢 |
| 社會學問答 | 社會學と事業 | 超然教育學 | 軍人の膽力 | 軍人座右銘 | 處世の歌 | 征露の歌 | 征露詩集 | 小學高等科字引一學年用 |
| 定價三十錢
郵稅四錢 | 定價廿五錢
郵稅十錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 | 定價二十錢
郵稅四錢 | 定價三錢五厘
郵稅二錢 | 定價二十錢
郵稅二錢 | 定價十五錢
郵稅四錢 | 定價十錢
郵稅四錢 |

全 二學年用

定價四十錢
郵稅四錢

全 三學年用

定價四十錢
郵稅四錢

全 四學年用

定價十五錢
郵稅四錢

中等國語讀本
一學年用

定價廿四錢
郵稅四錢

全 二學年用

定價廿四錢
郵稅四錢

全 三學年用

定價廿五錢
郵稅四錢

全 四學年用

定價三十錢
郵稅六錢

全 五學年用

定價三十錢
郵稅六錢

軍歌集

定價十二錢
郵稅四錢

高等美文資料

定價廿五錢
郵稅六錢

殘花集

定價廿四錢
郵稅四錢